

老舗 リブランディング

昔のテレビやゲーム機器などについていた赤白黄のRCA端子。この部品メーカーの老舗が、人工衛星を支える高周波部品メーカーに姿を変えていたようだ。1958年創業のワカ製作所は、ソニーなどへのサプライヤーとなることで成長し、テレビやビデオ、プレイステーションの背面端子など、かつての家庭エレクトロニクスの実態を支えた企業だ。90年代後半には売

ライフスタイル

ワカ製作所 (東京都新宿区、電子部品製造)



現在主力としているミリ波製品群。人工衛星などを支える高周波部品だ



麻績工場では超微細部品の精度調整を地元の主婦が手作業で行う

JAXA認める長野発技術

上高が60億円を超えたが、見据え、ミリ波帯と呼ばれる高周波領域の研究に着手。電磁気学理論に基づいた設計、高精度の切削加工、そして熟練工による組立調製作業の3要素を磨き上げた。0.8ミリコネクタで145ギガの伝送を実現し、通信機器や半導体製造装置、測定機器の内部配線に未来を見た。1990年代から通信の高速化を

望む農村の一角で、地元が高周波信号の反射や損失を招くため、理論と実測の両輪が欠かせない。性能の高さは宇宙航空研究開発機構(JAXA)にも認められ、人工衛星搭載用同軸コネクタでは唯一の認定メーカーに選ばれた。JAXAだけでなく、NTTドコモやソフトバンク、ソニーなど通信大手にも部品を供給する。転機を担ったのが、2005年入社若林佳之助社長だ。11年に父から事業を継ぎ、経営危機を現場で体験した世代でもある。「売り上げを追うより、価値を残すものづくりを」と高周波分野へ集中投資し、16年に新宿へ本社を移転した。23年6月にはTOKYO PRO Marketに上場した。上場によって開示やガバナンスを強化し、採用面の訴求力も高まった。「透明性は、信頼の源泉になる」。若林社長はこう語る。

驚く人は多い。機械では再現できない精密さと集中力が世界基準の品質を支えているのだ。同社の競争優位性は、標準品を基盤に顧客仕様へ細やかに対応できる柔軟性だ。月最大1100ロット、年8万件に及ぶ受注を支える生産体制では、こうした手作業の精度が何よりの信頼につながる。微細なズレ

藤俊)